

～車窓を楽しむ鉄道の旅～
美濃から伊勢へ 初夏の養老鉄道

関西本線の桑名駅から養老山地の東側を掠めて東海道本線の大垣駅を経て揖斐まで、揖斐川に沿って南北に走る鉄道が養老鉄道。昭和 9 年に伊勢電気鉄道養老線としてスタートしたが、その後養老電鉄となり、参宮急行電鉄、関西急行鉄道など経営母体が変わるような異変が続き、近鉄の一部となった後に平成 19 年に近鉄の 100% 子会社として分離独立した養老鉄道となった。

運行距離は 57.5Km だが、実際の運行は揖斐・大垣間の 14.5Km と大垣・桑名間の 43 km は分離されていて、それぞれが単独にピストン輸送をしている。二つの全く別の路線が走っているという感じなので、今回はメインルートと思われる大垣・桑名間にだけ乗ってみることにした。

岐阜県で一番低い山「石山」に登った後、JR 大垣駅の中のレストラン街で昼食をとり一休み。

養老鉄道の大垣駅は、JR 大垣駅の南側の隅にあった。桑名までの運賃は 810 円。JR の主要拠点駅だったこの駅は構内に走る線路が多く、そのまた一番南端に位置する養老鉄道の駅は、大垣駅全体を見渡すのに最適。西の方（関ヶ原方面）に目をやると、複雑に走る架線の向こうに伊吹山がどっかりと腰を下ろしているのが見えた。（右写真）

一本しかないプラットホームの右側は揖斐方面、左側は桑名



方面の折り返し線になっている。すぐに前方から二本の電車が並走して入ってきたので驚いたが、

双方からの折り返し電車の入線ということがわかった。

（左写真：折り返し桑名行となる回送電車）

桑名行は**大垣**を 13 時 46 分発、大垣城の周りにできた町並みを西へ走り、城を迂回するかのようによく左に曲がり南に向かうようになると**西大垣**。早速上下線の入替えのための停車時間が取られ、単線ならで



はの味わいが始まった。西大垣駅を出ると住宅地の間を通り抜けるように走り、やがて家並みが薄くなり始めた頃に梨畑が白い花を付けて出迎えてくれた。右手（西）遠方には関ヶ原から走ってくる尾根の末端の南宮山あたりが見えるが、東側には平野が広がるばかりで凹凸があるものは何も見えない。地図を見ればなるほど納得、長良川・揖斐川・木曾川が並走する大平原だ。

新幹線をくぐり抜けると**美濃青柳**、これを「みのやなぎ」と読むのにはいささか驚き、駅標の撮影までしてしまった。車窓に広がる水田はまだ水が入らず、どの田もレンゲの花盛り。どうやらこの地域では元肥のひとつとしてレンゲを蒔いているようだ。

友江は広がる水田の中の住宅地、田圃の方が主役のような景色だ。名神高速道路をくぐり抜けると**大外羽**

（おおとば）駅。駅の東側に大垣 IC、西側に養老 JCT がある。正面に養老山地、右には関ヶ原の山なみ。左の車窓に長々と横たわる平屋の建物が気になったが、大日本合成化学工業の大垣工場。

しばらく走ったあとで右に大きくカーブして杭瀬川・牧田川を渡り西に向かうようになると**烏江**（からすえ）。津市の伊勢湾岸に香良洲（からす）という地名があるが関係があるのだろうか。

右前方に伊吹山が大きく見え、正面に養老山地が近くなってきた。牧田川に沿って西北西に進むと養老 JCT の南側に広がる水田地帯。左にカーブして南西に向かうようになると**美濃高田**。養老山地にを正面に置いて突き進む形になり、山麓まで辿り着くと今度は南南東に進路を変えて山並みに沿って走るようになり**養老**駅に到着。木々の芽吹きが柔らかい色が美しく、所々に山桜らしい色彩を滲ませたような養老山地は春から初夏への橋渡しを感じさせる。養老の滝がありキャンプ場などの施設が整っているせいだろうか、小学校二年生の遠足らしい団体が乗ってきた。車窓の景色が見えにくくなってきたので、しばらくは子どもたち

を観察しながら会話を楽しむことにした。時々ノートにメモを取っているのを目ざとく見つけた子が「何をしているの？」と声をかけてきた。「電車の窓から何が見えたかを書いているんだよ」と言ったら「ふ〜ん」。「どこで電車降りるのかな?」「わかんない」「駒野だよ〜」「そうだ、駒野だ〜」子どもたちとの会話を楽しんでいる内に**美濃津屋**に停まったのに気がつかなかった。

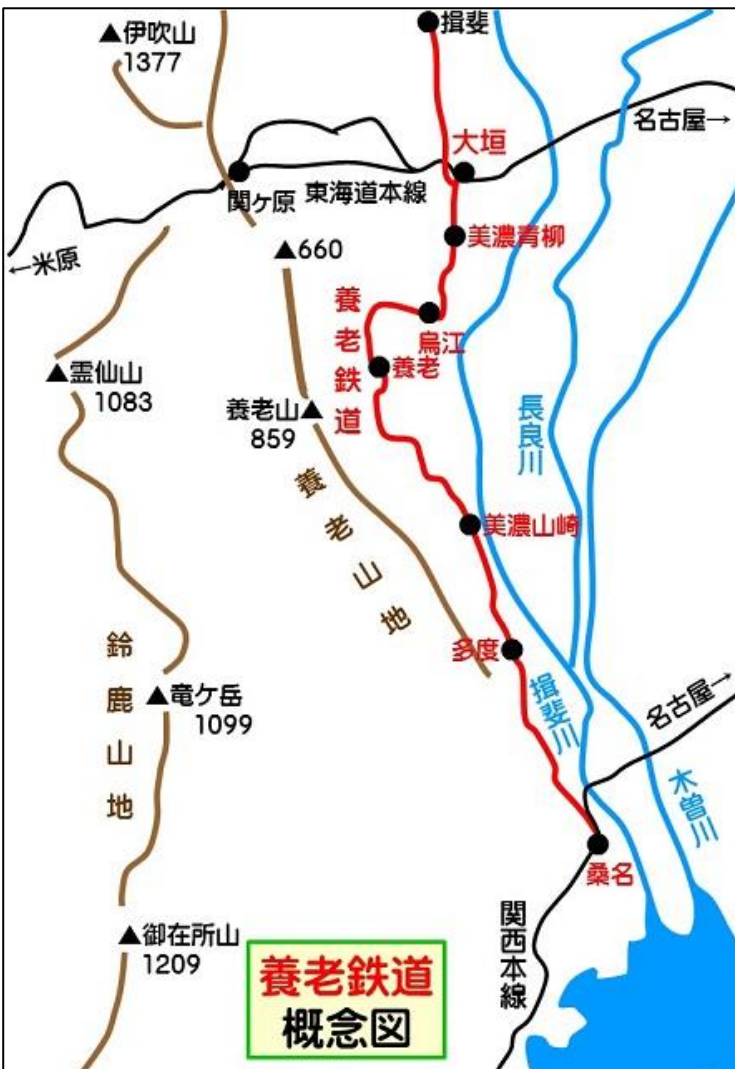
駒野、100人ほどの集団が下車していくと、再び車内は隙間だらけで静寂になってしまった。

養老山地の裾を走る電車は、山肌をなめるように走り、様々な景色を見せてくれる。駒野を過ぎると津屋川を合せて水量を増した揖斐川が左手の車窓に並走するようになる。川の流れて沿ってやや南向きに走るとなると**美濃山崎**。

盤若谷という天井川をくぐり抜けると**石津駅**に入る。駅の回りに広がる人里は、ごくありふれたどこにでもありそうな日本的な集落。車窓に「ミスタートンカチ」という大きな看板が飛び込んできた。いかにもホームセンターらしい名前がわかりやすい。

美濃松山、周辺を見回したが松林は見当たらない。養老山地の最南端に多度川が流れていて、これを渡ると**多度**（たど）。右側の車窓に山がなくなり、にわかには明るくなった。今度は小学校の中学年と思われる団体が100人以上の団体で乗ってきた。車窓はもう平野そのもので、**下野代**（しものしろ）を過ぎると集落の至る所に竹林が目立つようになってきた。**下深谷**（しもふかや）は東名阪自動車道の桑名東ICの目の前にある。南東に向かって走り、東名阪自動車道と国道258号線を抜けると**播磨**。地図を見ると近くに播磨神社もあるし、何故ここに播磨という地名があるのか気になる。播磨国以外の土地に存在する「播磨」という地名は、その土地にある「播磨屋」という屋号の屋敷があったことに由来するものが少なくないという話を読み物で目にしたことがあるが、ここも同じなのだろうか。

左から寄ってくる関西本線と近鉄名古屋線の線路を合せると終着駅の桑名に到着。



養老鉄道桑名駅は桑名駅の東口（海側）にあるが、三岐鉄道西桑名駅はさらにその先の構内の末端にある。

いずれも昼間のせいかもしれないが人通りはあまり多くはない。その昔、桑名は東海道を旅する人々が熱田から海上七里を渡って陸に上がった地点で、かなり栄えた土地らしい。長い間海側に町が形成されてきたのだろうが、現在では商業施設や公共施設は西口（山側）に集まっている。桑名という地が交通の要衝ではなくなったという歴史上の変遷が原因だと思うが、東海道・お伊勢参りの時代と比べると寂れたというイメージは拭えないのだろうと感じた。

大垣から1時間10分、初夏と呼べる日が近い一日、心地よい車窓の旅を楽しむことができた。

以上